

## 「タラントは埋めておかない」

14 また天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。15 すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には五タラント、ある者には二タラント、ある者には一タラントを与えて、旅に出た。16 五タラントを渡された者は、すぐに行って、それで商売をして、ほかに五タラントをもうけた。17 二タラントの者も同様にして、ほかに二タラントをもうけた。18 しかし、一タラントを渡された者は、行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。19 だいぶ時がたってから、これらの僕の主人が帰ってきて、彼らと計算をしはじめた。20 すると五タラントを渡された者が進み出て、ほかの五タラントをさし出して言った、『ご主人様、あなたはわたしに五タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに五タラントをもうけました』。21 主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。22 二タラントの者も進み出て言った、『ご主人様、あなたはわたしに二タラントをお預けになりましたが、ごらんのとおり、ほかに二タラントをもうけました』。23 主人は彼に言った、『良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ』。24 一タラントを渡された者も進み出て言った、『ご主人様、わたしはあなたが、まかない所から刈り、散らさない所から集める酷な人であることを承知していました。25 そこで恐ろしさのあまり、行って、あなたのタラントを地の中に隠しておきました。ごらんください。ここにあなたのお金がございます』。26 すると、主人は彼に答えて言った、『悪い怠惰な僕よ、あなたはわたしが、まかない所から刈り、散らさない所から集めることを知っているのか。27 それなら、わたしの金を銀行に預けておくべきであった。そうしたら、わたしは帰ってきて、利子と一緒にわたしの金を返してもらえたであろうに。28 さあ、そのタラントをこの者から取りあげて、十タラントを持っている者にやりなさい。29 おおよそ、持っている人は与えられて、いよいよ豊かになるが、持っていない人は、持っているものまでも取り上げられるであろう。30 この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう』（マタイによる福音書25章14節—30節）。

今日読んでいただきましたマタイによる福音書には主人と3人の僕の姿が書かれています。ここに記されている主人とは神様のことで、僕とは私たちのことです。それぞれに与えられているタラントとは貨幣の単位でありまして、註解書によりますと、一タラントを米ドルに換算しますと、それは約60万ドル、単純に一ドル100円としますのなら、日本円で6000万円となるそうです。すなわち、たとえ一タラントと言えども、その価値はとても大きいということになります。

読んでお分かりのように、このところで主人は3人の僕達にそれぞれ5、2、1タラントを預けて旅に出ました。そして、だいぶ時がたってこの主人が帰ってきた時にその預けていったものが、どのように用いられたのか決算をしたというのです。

このたとえ話をそのまま私達に当てはめますのなら、私達は今、神様から与えられている賜物、ギフトを用いる機会が与えられているということであり、やがていつの日かその賜物を私達がどのように用いたのかということが問われる日が来るということです。

このところから今日は私たちが神様から等しく与えられている2つのことをお話します。一つ目、それは「与えられている時間」ということです。

### 与えられている時間

私たちは今、今日という一日が始まって約9時間30分を過ごしています。皆さんの中に「いいえ、私だけはまだ5時間です」と言う人はいません。誰もが同じ長さの時間を過ごしています。そして、今日という一日に残された時間も私達は皆、同じ長さです。私たちにはそのような公平な時間が神様から与えられています。

この譬に記されている僕たちも、19節にあるようにそれぞれ等しく「主人がだいぶ時がたって帰ってくるまで」時間がありました。彼らに与えられていた時間は皆、同じでした。5タラント与えられた者の方が1タラントを与えられた者よりも多くの時間が与えられたということではないのです。

もちろん、私たちの寿命は異なります。しかし、私たちには一日、一月、一年、等しい時間が与えられています。そして、私たちの言動はこの時間の中で全てなされるのです。

伝道の書3章1節—9節にはとても興味深いことが書かれています。読んでみましょう。

① 天が下のすべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。② 生るるに時があり、死ぬるに時があり、植えるに時があり、植えたものを抜くに時があり、③ 殺すに時があり、いやすに時があり、こわすに時があり、建てるに時があり、④ 泣くに時があり、笑うに時があり、悲しむに時があり、踊るに時があり、⑤ 石を投げるに時があり、石を集めるに時があり、抱くに時があり、抱くことをやめるに時があり、⑥ 捜すに時があり、失うに時があり、保つに時があり、捨てるに時があり、⑦ 裂くに時があり、縫うに時があり、黙るに時があり、語るに時があり、⑧ 愛するに時があり、憎

むに時があり、戦うに時があり、和らぐに時がある。⑨働く者はその労することにより、なんの益を得るか。

私たちには、笑う時、泣く時、黙る時、語る時というようにそれぞれの時があります。これらの、それぞれの時を私達がどのように受け止め、それをどのように管理して、用いるのかということが私達に委ねられています。

エペソ書（5章16節）やコロサイ書（4章5節）などを見ますと「今の時を生かして用いなさい」というような言葉が書かれています。そうです、私達に与えられている時を、私達がどのように用いるのか、これはとても大切なことです。

しかし、それにしてもこの「時」には不毛と思われる時があります。一言でいうなら「辛い」としか言いようのない時もあります。しかし、もし私達がそのような時にも主を見上げ、あちらがこのような時に私達に何を気がつかせようとしているのかということに思いを向けるのなら見えてくることがあります。

先週、私は「神の視点をもたない人間は環境の奴隷だ」とお話ししました。私達が辛い時をどのように受け止めるかは私達次第です。もし私達がその「辛い時」を自分が見ている通り、感じている通り、「辛い時」として評価するなら、それはまさに辛い時であり、その辛さが私達の心身をコントロールします。しかし、私達がその時を神様の視点をもって受け止めるのなら、その時が打って変わって価値ある時として見えてくることがあります。

目に見える成果が何も感じられない時。何の実りもないように思える時。確かに目の前に成果という実を見ることができないかもしれません。しかし、そんな日は目には見えませんが、やがて実が実る日があることを信じて、目には見えませんが、地中深く根をはる時として信仰をもって受け止める。その時はまだ実りの収穫の時ではないと理解し、さらなる実りを得るために今は地中深く根をはる時なのだということを神様の視点は私達に教えてくれるのです。

同時に常にではありませんが、物事がうまくいくというような時も私達は経験することがあります。その時は私達にとりまして心地よく、そのままその時が続いてほしいと願いますが、それをつかの間、打ち寄せる波のようにすぐにまた色々な現実に向き合います。

「晴れている時こそ、屋根を修理すべきだ」という言葉を聞いたことがあります。晴れているから、その晴れ間を十分に楽しんだらいいでしょう。しかし、晴れているか

からこそ、その間に、必ずめぐってくる雨にも備える。晴れている時を賢く使い、雨が降る時にも備える。

時は全て私達に公平に与えられています。そして、その時の用い方は全て私達一人一人に委ねられているのです。二つ目、それは「与えられている賜物」ということです。

### 与えられている賜物

私たちに神によって公平に与えられているもう一つのもの、それはここでタラントと呼ばれているもので、それは賜物、ギフトと呼んでもいいでしょう。

私は毎週、日曜日が終わるとその日にはいていた靴を磨きます。まだアメリカに来た頃、大先輩の牧師から埃のついた靴をはいていて注意されたことがありました。そのありがたい忠告を感謝して、以来、続けています。「礼拝メッセージ」とか「伝道」と靴磨きは何ら関係のないように思われますが、どこかでつながっていると信じています。

このように自分の靴を磨いている時に、時々、一人の人のことを思い起こします。その人の名前は井上源太郎さんといいます。この方は永田町の東急ホテルで長く靴を磨くシューシャインを務め、現在はホテル・オークラでシューシャインをしています（オークラと言えども、私とは無関係のホテルです）。

一見、よく私たちが日本の都会で見かける靴を磨くおじさんです。しかし、この方の元には日本全国、果ては海外から靴を磨いて欲しいと靴が送られてくるのです。もちろん諸外国にも靴磨きはいるのですが、井上さんの元には国内のみならず、海外からはかつてオードリ・ヘップバーン、ソフィア・ローレン、マイケル・ジャクソンというような人たちが靴を持ってくるというのです。

靴磨きなら5歳の子供でもできます。しかし、井上さんはその道を究めました。ご自身は、履かずとも銀座や赤坂の靴屋を見て回り、一足何十万円もする靴を「研究のために」惜しむことなく買い込み、研究機関に販売されている靴のクリームの成分を調べてもらったり、外国のお得意さんも多いので英語やフランス語を学び、英語に関しては今や、日常会話は問題がないということです。「靴磨き」という仕事により、井上さんはその範疇にとどまらず、自らの技能の幅を広げ、それを伸ばしました。

人は「たかが靴磨き」と思われるかもしれませんが。同じように、もし井上さんも「俺は靴磨きにすぎない」と腐ってしまったらどうでしょうか。言うまでもなく彼の働きは彼が思っているように靴磨きにすぎず、それ以上のことはありません。

私達はシューシャインではありませんが、私達一人一人に神様は与えてくださっているものがあります。しかし、それを見出し、それをを用いるか、用いないかは私達にかかっているというのがこの譬が言っていることです。井上さんはクリスチャンではありませんが、確かに彼は自分が与えられている賜物を最大限に用いた人と言うことができるでしょう。

先にお話ししました「時間」は、この「賜物」と密接に関係しています。すなわち、賜物を知っている人はその賜物をさらに伸ばすために、その限られた時間をこの賜物のために惜しみなく用いるのです。一日の仕事が終われば、パチンコに行くことも、夜な夜な酔いつぶれることも、その時間を誰かのために、また霊的成長のために用いることも私達に託されてます。

タラントは地中に埋めて保管しておくものではありません。このたとえ話の中では僕がそれをを用いることにより、主人が益を受け、主人はそれをととても喜びました。私達も与えられているギフトを地中に埋めて、手つかずにしておくべきではなく、それを主の栄光のために大いに用いるべきなのです。

昔、神様はモーセを召して「イスラエル民族救出のリーダーとなれ」とお命じになりました。かつて同胞イスラエル人から辱しめを受けた覚えのあるモーセは、しり込みしました。その時、主は何と言われたのでしょうか。

「あなたの手にあるそれは何か」（出エジプト記4章2節）。その時に彼の手にある「それ」は何の変哲もない一本の羊飼いの杖でした。しかし、その杖をもって神様はモーセに不思議とするしを行わせました。しかし、モーセはなおも尻ごみしました、「ああ、主よ、わたしは以前にも、またあなたが、僕に語られてからも、言葉の人ではありません。わたしは口も重く、舌も重いのです」（出エジプト4章10節）。すると主は言われました「誰が人に口を授けたのか。おし、耳しい、目あき、目しいに誰がするのか。主なる私ではないか。それゆえ行きなさい」（出エジプト4章11節）。

あなたの手にある「それ」、あなたの顔にある口、耳、目、それで十分なのです。「それ」があるということは、もう既に主から十分な賜物を預かっているということです。賜物は魔法の杖である必要はありません、遠くまで早く走れる足が必要なのではないのです。今、あなたが神様から与えられている「それ」で十分なのです。それを地中に隠さずに主のために用いるのです。

私は幼いころ、千葉県の新崎（こうざき）という町に住んでいました。そこでは、よく秘密基地を造りました。色々な作り方があったのですが、その一つに穴を掘るので

す。自分の体が入るほどの大きな穴を掘るのです。そして、その上にトタン板をおいて屋根とするのです。その中は最高の基地となるのです。秘密基地といいます。全然“秘密”ではなく、道行く人は全て「あの教会の息子がまた、馬鹿なことをやっている」と知っているのですが。

この神崎という町は、昔は海の中だったのです。故に穴を掘り始めるとザクザクと貝殻が出てくるのです。ほとんどの貝殻はしかし原型をとどめておらず、無残にも形が崩れているものでした。それらは、大昔に地中に埋もれていったもので、私が土を掘らなければ、きっとその姿を現すことはなかったことでしょう。

皆さん、この貝殻のように、かつては命があった多くのタラントが今日、地中に埋もれています。私にはこんなことしかできない。こんなちっぽけなこと。だから埋めておこう。それでいいのでしょうか。そもそも神様は私達が埋めておけばいいというものを私達に与えることはありません。

私は時々、フツと思うことがあるのです。たとえばここにプロの作家がいるとします。その人がプロの作家になれたのは、彼がそのギフトを見出し、そのギフトを信じて精進したからでありましょう。彼は自分でそのギフトを見いだしたのかもしれないし、誰かがそのギフトを指摘し、励ましてくれたのかもしれない。

そう考えますと、この世界には彼と同じように、いやそれ以上の物を書くギフトが与えられている人が大勢いるかもしれません。いいえ、いるはずです。しかし、その人はそのギフトに気がつくことではなく、作家ではなく、リアルターとして、一生を終えるかもしれません。

作家になることが良く、リアルターが悪いといっているのではなく、でもそれが事実であるのなら、どこことなく残念な気持ちになるのは私だけでしょうか。そのような意味で私達が神様から与えられているギフトを見出し、それをさらに良きものにしようと日々、精進し、それを使いこなす、使い切るということはとても大切なことだと思われませんか。

聖書の譬を見ますと、5タラントの者は5タラント増やしました。2タラントの者もそうでした。そこには数字的な違いがあります。しかし、主人がこれらの二人に語りかける言葉は全く同じなのです。すなわち21節と23節です「良い忠実な僕よ、よくやった。あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう。主人と一緒に喜んでくれ」。

ここには、僕たちが自分が与えられているものを最大限に用いたことに対しての主人の「私と一緒に喜んでくれ」という言葉があります。これは、不思議な言葉です。僕

が主人に「ご主人様、私は与えられたものを、こんなに増やすことができました。どうぞ、一緒に喜んでいただけませんか」ではないのです。主人の方から僕に向かい「あなたは私が与えた賜物をこんなに用いたのだ、だから私と一緒に喜んでくれないか」というのです。

皆さん、私たちが与えられている時間を使い、与えられている賜物を用いていく時に一番、喜ぶのは私たちの主なのです。神様は私達が持ち合わせていないものを絞り出すことはしません。しかし、私達が与えられているものを使わないことを悲しまれます。与えられている賜物を十分に用いることを私達に期待されるお方なのです。

そして、この箇所にあるように「あなたはわずかなものに忠実であったから、多くのものを管理させよう」と主は言われるのです。その報酬としてさらに大きな働きを主は与えてくださるというのです。しかし、せっかく与えられている賜物を土に埋め、用いないのであるならば、与えられているものは取り上げられ、それを用いている者に与えられるというのです（マタイ25章28節—30節をPPに）。

今日は私たちが与えられているものを2つお話しました。それは時間と賜物です。これらは既に私達と共にあるものです。この二つは密接につながっています。与えられている時間を用いて、賜物を用い、そして磨くのです。

主にある皆さん、このメッセージは神様から私達に投げられているボールのようなものです。そのボールを受け止めた私達は、それをどう受け止め、そのボールをどうするのか。それは一重に私達にかかっているのです。それを地中に埋めて、人生を終えるのか、それを主のために用いていくのか、私達はどちらを選ぶのでしょうか。

あなたは自分に与えられている時間をどう使っているのでしょうか。神様があなたに与えてくださっている賜物を、あなたは主の栄光のために用いているのでしょうか。お祈りしましょう。